

「目配り」・・・誰かの様子がいつもと違うなと気づくこと。「気配り」・・・何かあったのと話を聞いて共感すること。「心配り」・・・相手の立場に立って苦しみや喜びを分かち合うこと。3つのいずれかに出くわしたとき、決まって彼の顔が頭に浮かぶ。

“ええなあ！完和さん、100万円や！”

その場で聞くとユーモア交えた関西風の日常会話にしか聞こえない。

ただ、彼が言葉にする「100万円」は最上級の称賛と敬意が込められた、最も価値あることを表す代名詞なのだ。

声の主は大路裕也さん 36歳。自分の感情を素直に解き放ち、感謝と褒めの言葉で人々を励ますことの大切さを僕に教えてくれた人。

2008年、僕はやまなみ工場の施設長を拝命した。大路さんがやまなみ工場にやってきたのはその翌年。既に「山下完和」という言葉を聞く機会もほとんどなくなり、「所長として」「施設長らしく」「管理者であれば」そんな呪文で自らを縛り続ける僕のことを彼は役職名で呼んだことが一度もない。

孤独と劣等感に苛まれる日常、彼に「完和さん」と呼ばれる時は唯一“素”の自分に出会える数少ない時だ。

それに、彼に“ええなあ”って言ってもらえた時の優しくてたまらなくあたたかい気持ちは何度経験しても新鮮で心地がいい。

彼と初めて会ったのは実はやまなみ工場が初めてではない。

自宅からやまなみまでの中間地点、三重と滋賀の県境にある然程賑わいのない道の駅に立ち寄ったある日、駐車する際、ふとルームミラーを覗いてみると安全確認をしながら一生懸命手を振って誘導してくれる従業員の方がいた。不思議に感じたのは、周りを見渡してもほとんど車は止まっていないのに、その働きっぷりはまるで混雑時のディズニーランド並みだった。

軽く会釈をした僕に彼は無言でほほえんだ。そしてトイレに行くときも、トイレから出てきた時も、駐車場から出ていくときにもこやかな視線をくれた。同じようなことが半年ぐらいの間に2度3度あったらどうか。

同時期、僕は通所を希望されるご相談を受けご見学にいらしたお母様と見知らぬ男性と席に着いた。

お母様は穏やかながら切実な本心を伝えてくれた。「この子は本来とても明るくて力のある人なんです。実は一般就労し毎日一生懸命地域の中で頑張っているんです。でも最近笑顔が減って以前のような元気がなくて」・・・目の前の男性は確かにうつむき加減でどことなく元気がない。

僕はお母様に聞いてみた。「何か思い当たる原因はおありですか？」「実は今の職場で順調に働いていたのですが、いつも快くこの子のことを支えてくれた方が退職されて」・・・お話を聞きながらうなづく僕は、心の中でつぶやいた。「そうやんな～そもそも僕だって一人でなんて生きていけないし、一人じゃ何もできないし楽しくもない」・・・厚かましくも自分を輝かせてくれる何か、自分を輝かせてくれる誰かを探していた僕は何となく彼の状況を勝手に自分に重ねていたのだ。

「現在はどこにお勤めですか？」「実はとある道の駅で」・・・「あそこの道の駅なら僕もたまに利用しますよ」・・・そういえばいつも・・・

その瞬間、目の前の男性がいつも視線をくれる少しユニークな従業員であることに気づいたが、あえて

言葉にはしなかった。

やまなみ工房は絵が描きたい人や粘土が得意な人が通う場所ではない、自分が幸せな気持ちになれるミッションを自分で選ぶことのできる場所だ。

大路さんがやまなみ工房で持ち前のユーモアと笑顔を開花させるまで時間は必要なかった。

彼は今、独特な表現方法で絵を描く。芸術がよくわからない僕は、彼の絵を絶賛する多くの方々の目の輝きや驚きを不思議に感じることもさもある。ただ彼の魅力は誰よりも知っている。

なぜなら僕は彼に最も助けられてきたからだ。

今なら分かることがある。

彼のユーモアはただ声を張り、いたずらにその場を茶化しているのではない。

人と人が絡まって渋滞しないように、目の前の意見だとか人がぶつからないよう常に先を見通して、行きかう人の緊張をほぐし交通整理してくれていたのだ。

毛先を数ミリカットしたら「毛切った？」と真っ先に気づいてくれる大路さん。

少し微熱を感じた瞬間、「大丈夫か？」と異変に気づき心配してくれる大路さん。

「彼はよく所長の物真似をするんですよ」スタッフにそう紹介される大路さんは、誰よりも他者に関心を持ち思いやりと配慮の出来る達人だった。

ええなあ！100万円や！！

そう言ってチームの批判を一切しない、チームの輪を絶対乱さない。

彼の優しさは我々が持っていないものだ。つくづくそう感じる。

確かに特別な支援が必要かもしれない。

でもそれって大路さんだから言えること？

いや、僕だって、あなただって実はそうじゃないですか？

大路さんは僕の人格や価値観には絶対干渉しない。

人の長所にひたすら光をあてて、欠点や短所を認めてくれる。

悲しみや辛さを人前で出してはいけないと思い込んでいた。

感情や思いを素直に表現できない不器用な人間だと自分を決めつけ、

意見を伝えることや助けを求めることに躊躇し素直になることは難しいと諦めていた。

ちょっとやそっとの困難ぐらいでモチベーションは下がりません。諦めることもありません。

今、僕の目の前にいる大路さんは怒りだとか妬みだとか全てを除き、

ご自身と全ての仲間に100%の愛情を注ぐ強い心を持っている。

本当に心から笑いあえるような仲間と真剣にやまなみ工房とゆとりあで生きていけたら・・・

“愛こそすべて”これからも山下完和は大路さんと一緒に 100 万円の日々を過ごしたい。  
幸せに向かって。

やまなみ工房／ゆとりあ 施設長 山下完和